

上野殿御返事

建治四年二月二五日 五七歳

蹲いものかしら 鴨、くしがき、焼米、栗、たかな筍な、すづつ給酢 筒び候ひ了んぬ。月氏に阿育大王と申す王をはしき。一閻えん ぶ だい浮提えん ぶ だい四分の一をたな掌ごころににぎり、竜王をしたがへて雨を心にまかせ、鬼神をめしつかひ給ひき。始めは悪王なりしかども、後には仏法に帰し、六万人の僧を日々に供養し、八万四千の石の塔をたて給ふ。此の大王の過去をたづぬれば、仏の在世に徳勝童子・無勝童子とて二人のを幼さなき人あり。土の餅を仏に供養し給ひて、一百年の内に大王と生まれたり。仏はいみじしといふ対ども、法華經にたいしまいらせ候へば、螢火と日月との勝劣、天と地との高下なり。仏を供養してかゝる功德あり。いわうや法華經をや。土のもちみをまいらせてかゝる不思議あり。いわうやす種 種 常 果づのくだ物をや。かれは飢 渴けかちならず、いまは飢うへたる国なり。此をもって思をもふに、釈迦仏・多宝仏・十羅刹ら せつ によ女守いかでかまぼらせ給はざるべき。

そもそも抑 今の時、法華經を信ずる人あり。或は火のごとく信ずる人もあり。或は水のごとく信ずる人もあり。聴聞する時は燃 立もへたつばかりを思もへども、とを遠ざかりぬれば捨すつる心あり。水のごとくと申すはいつも退たいせず信ずるなり。此はいかなる時常もつねはたいせず訪とわせ給へば、水のごとく信ぜさせ給へるか。たう尊としたうとし。ま実ことやらむ、い家 煩ふの内所 為にわづらひの候なるは、よも鬼神の羅 刹そぬには候はじ。十らせち女の、信心の分 際ぶんざいを御心みぞ候らむ。まことの鬼神ならば法華經の行者をなやまして、かうべわれんと思をもふ鬼神の候べきか。又、釈迦仏・法華經の御虚そら事思の候べきかと、ふかくを食ぼしめし候へ。恐々謹言。

二月二十五日

日 蓮 花 押

御 返 事